

「第三十六回庭野平和賞」贈呈式 名誉会長ご挨拶

本日は、「第三十六回庭野平和賞」の贈呈式に際し、文部科学事務次官・藤原誠様、日本宗教連盟理事・岡田光央様、駐日ローマ教皇庁大使館・臨時代理大使・ヴェチエスラヴ・トゥミル様をはじめ、多くのご来賓のご臨席を賜り、あつく御礼申し上げます。

今年度の庭野平和賞を、米国・ノートルダム大学名誉教授のジョン・ポール・レデラック博士にお贈りできますことは、大変光栄なことでございます。選考にあたられたアン・ジェウン委員長さまはじめ、庭野平和賞委員会の皆さまに深く敬意を表する次第であります。

只今、アン委員長さまから贈呈理由の説明がありましたよう、博士は、非暴力・平和主義を特長とするメノナイトの信仰をもとに、「紛争変革」という独自の理論を提唱され、実際に世界各地で調停・和解活動に取り組んでこられました。

この「紛争変革」という考え方を学ぶため、私は、日本語に翻訳された博士のご著書・『敵対から共生へ——平和づくりの実践ガイド』を読ませて頂きました。

博士の提唱する「紛争変革」という理念は、暴力を伴う地域紛争において有効であるだけでなく、私たち人と人との間で見られる対立や確執に対しても、的確な示唆を与えてくれます。今日、この会場にお出でのお一人お一人が、深く心に刻むべき重要なメッセージであろうと思います。

一般的に私どもは、「紛争の解決」という言葉を使います。

一方、博士は「紛争の変革」を提唱されています。この「解決」と「変革」にはどのような違いがあるのでしょうか。

博士のご著書の巻末で、「解説」をお書きになつたメノナイト平和宣教センター理事の片野淳彦（かたの・あつひこ）師は、次のような大変分かりやすい譬えをしておられます。例えば、不登校をしている生徒に対して、「どうしたら学校に行かせられるか」という問題の立て方をするのが、「解決」のアプローチ。

それに対しても、「変革」のアプローチは、不登校という出来事だけに執着せず、背景にあるいじめや、教師、家庭の問題、社会全体の構造的な問題にも広く目を向け、総合的に取り組んでいくということであります。

目先にとらわれないで、できるだけ長い目で見る。あるいは一面にとらわれないで多面的に、できるならば全面的に見る。枝葉末節にとらわれず、できるだけ根本的に考える——このことは、どのような場面においても忘れはならない重要な視点であります。

博士の「紛争変革」という理念の中で、私が注目したのは、「紛争や衝突は、人間にとつて、ごく当たり前の関係力学の一部である」と捉えておられることがあります。

私の信じる仏教では、「十界互具」と言つて、人間は誰でも仏のような心から、地獄の鬼のような心まで、同時に具えていると教えています。

他者に不寛容であつたり、暴力性を持ち合わせたりすることは、ほかならぬ自分自身に内在する課題です。同時に、人間は誰もが、生まれながらにして仏の悟り、宇宙の真理を認

識する能力を持ち、仏となる種子、つまり仏性を宿していると教えていきます。

そのように自分と他者を区別せずに、己自身の問題と見ることを前提にして、相手を怨み、非難し、攻撃する心から、相手を信頼し、慈しみ、敬う心へと進化させていくのが、「紛争変革」への具体的な歩みであり、それを根底で支えるのが、メノナイトの信仰の力であります。

そもそも人間は、煩惱があるからこそ、それを何とか解決したいと菩提心を起こします。それを仏教では、「煩惱即菩提」と申します。菩提——つまり悟りを求める心と、それを妨げる煩惱は、ともに人間の本性の働きであり、煩惱がやがては悟りへのかけがえのない機縁となっていくのであります。

このことについて博士は、「社会的衝突は、建設的な変化を生みだす『いのちの機会』『賜物（ギフト）』」と言われています。博士の創造的で愛に満ちた表現に深く共感し、改めて敬意を表する次第であります。

さて、博士は今回、初めて日本を訪問されたと伺つておりますが、意外なことに、松尾芭蕉に関心を持たれ、自らも俳句を詠まれているということです。

複雑な現象の中にある本質を見抜き、単純な言葉で言い表す芭蕉の俳句は、「紛争変革」に携わる上でも大切な視点となつた、と言われています。

ここで博士の俳句を紹介させて頂きたいと思います。一九九〇年代、ミャンマーの紛争地域に入られた博士は、その土地の歴史や伝統、人々の価値観や思いを知る大切さを実感されたそうです。また相手を変えようと焦つたり、無理やり物

事を進めたりしてはいけない」とを肝に銘じたということです。

その時の一句です。

**Don't ask the mountain to move,
just take a pebble each time you visit.**

「山を動かそうとするのではなく、訪問するたびに小石を持ち帰ろう」——直訳すると、このような意味合いであります。

博士の「紛争変革」の歩みが、どれほど地道かつ辛抱強く進められているかが、ありありと伝わる一句であります。

博士が、これまで紛争の調停や和解に貢献していられた国は、実に三十五に及びます。

その経験をもとに、ノートルダム大学やイースタン・ナノメイト大学の教授を務められているほか、ヨーロッパや中米の大学でも講師として、後進の育成にあたられています。また世界各地で青年のリーダーを育てておられます。

「紛争変革」の理論を発展させて開発されたプログラムは数百に及び、実施国は、三十五カ国にのぼります。この著書も一十四点発刊されていると伺っています。

それらは全て、「紛争変革」の歩みを継承していく後継者の育成を目指したものにほかなりません。

博士は、こうおっしゃっています。

「平和は、静的な『終局の状態』であるというより、むしろ、継続的に関係の質を進化させ続けるもの」と。

いつの時代にも起り得る紛争・衝突を適切に変革し続け

ていくのが、最も現実的な「平和」であり、そのためには、慈しみの心を持つて平和を希求する人材の育成が不可欠なのであります。

本日の贈呈式を契機として、博士の願いと行動を、より多くの人々が共有することを期待し、また博士がご健康で、これまで同様にご活躍くださることを祈念して、挨拶と致します。

ありがとうございました。